

II 研究開発の内容（詳細）

1 会議関係

(1) 魅力化構想会議・コンソーシアム会議

大槌高校では、高校と町行政、町議会、各種学校の教育機関及び企業、研究機関との連携を拡充するとともに、生徒の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の充実を図り、県が設置するコンソーシアム会議と町が主催する大槌高校魅力化構想会議を設置している。

ア 魅力化構想会議・コンソーシアム会議 委員

| No | 氏名 | 所属・役職 |
|----|---------|------------------------|
| 1 | 平野 公三 | 大槌町長 |
| 2 | 青山 潤 | 東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 教授 |
| 3 | 小松 則明 | 大槌町議会 議長 |
| 4 | 継枝 斉 | 大槌高等学校 校長 |
| 5 | 岩崎 友一 | 岩手県議会 議員 |
| 6 | 芳賀 潤 | 大槌町議会 総務教民常任委員会 委員長 |
| 7 | 後藤 力三 | 大槌商工会 会長 |
| 8 | 今村 久美 | 認定NPO法人カタリバ 代表 |
| 9 | 千田 伏二夫 | 株式会社千田精密工業 取締役会長 |
| 10 | 神谷 未生 | 一般社団法人おらが大槌夢広場 代表理事 |
| 11 | 阿部 司 | 大槌学園 PTA 会長 |
| 12 | 芳賀 新 | 吉里吉里学園 PTA 会長 |
| 13 | 三浦 文雄 | 大槌高校同窓会 会長 |
| 14 | 小林 隆広 | 大槌高校 PTA 会長 |
| 15 | 北田 竹美 | 大槌町副町長 |
| 16 | 松橋 文明 | 大槌町教育委員会 教育長 |
| 17 | 小石 敦子 | 大槌学園 学園長 |
| 18 | 浅沼 寿典 | 吉里吉里学園中学部 校長 |
| 19 | 谷藤 怜美 | 大槌町教育委員 |
| 20 | 八木澤 弓美子 | おおつちこども園 園長 |

イ 魅力化構想会議・コンソーシアム会議 オブザーブ

| No | 氏名 | 所属・役職 |
|----|--------|--------------------------|
| 1 | 中村 智和 | 岩手県教育委員会事務局 学校教育室 高校教育課長 |
| 2 | 前川 啓太郎 | 岩手県教育委員会事務局 学校教育室 指導主事 |
| 3 | 作山 雄一 | 大槌高校 事務長 |
| 4 | 鈴木 紗季 | 大槌高校 教務課長 |
| 5 | 澤村 勇一 | 大槌高校 生徒指導主事 |
| 6 | 田中 貴広 | 大槌高校 進路指導主事 |
| 7 | 藤原 淳 | 大槌町 総務課長 |
| 8 | 太田 和浩 | 大槌町 企画財政課長 |
| 9 | 岡本 克美 | 大槌町 産業振興課長 |

ウ 魅力化構想会議・コンソーシアム会議 事務局

| No | 氏名 | 所属・役職 |
|----|-------|---------------------|
| 1 | 竿代 愛也 | 大槌高校 副校長 |
| 2 | 三浦 大介 | 大槌町教育委員会事務局 参与兼教育次長 |
| 3 | 吉田 智 | 大槌町教育委員会事務局 学務課 課長 |
| 4 | 平野 正晃 | 大槌町教育委員会事務局 学務課 班長 |
| 5 | 菅野 祐太 | 大槌町教育委員会事務局 教育専門官 |

エ 第12回大槌高校魅力化構想会議兼普通科改革支援事業

令和4年度第1回コンソーシアム会議

日 時：令和4年8月2日（火）14:00～16:00

場 所：岩手県立大槌高等学校

内 容：新委員紹介、事業経過報告（今年度及び来年度入学者数現状分析）
全国留学事業について（はま留学2期生より報告、はま親制度等）、
普通科改革支援事業について（事業計画、今後の検討スケジュール等）

発言要旨：

- ・ 大槌ならではの生活や自然環境を活かした高校づくりをしていくべき。大槌高校に通えば子どもが幸せになれると親も思えるような学校になってほしい。
- ・ 地元の魅力を見つけるためには、いま暮らしている場所とは違った環境での活動や学びが必要なのではないか。
- ・ 町内でも、はま研究会に入りたいから大槌高校に行きたいという生徒がいる。高校での学びによって、高校卒業後の進路選択の幅を広げてほしい。
- ・ Well-being の観点から、幸福感の得られる学校生活や将来に希望を持てる生徒を育ててほしい。
- ・ 小中高の段階は失敗が許される時期だからこそ、失敗する経験も積めるような学科や高校であってほしい。
- ・ 地域で大切にされる経験だけでなく、転んでも地域の人たちが支えてくれる実感を持たせてほしい。
- ・ 生徒にとって学びたいことや取り組んでみたいことがあると思えるような学校になってほしい。子どもたちに「もっと知りたい」と思わせるのが学校の本質ではないか。
- ・ 「普通科-普通科」の方もこれまで通りとするのではなく、改革を行うべきである。
- ・ どの学科においても、基本的な知識のベースを育むことを大事にしてほしい。
- ・ 地域社会に関する学科では、地域課題だけでなく日本全体や世界の課題とも関連させながら学びを深めてほしい。
- ・ 一日中地域に出て学ぶなど、教科や場所に縛られず思いきった取り組みが必要ではないか。
- ・ 管内就職者が年々減少している。新しい学科ができることで、地元就職する生徒がさらに少なくなるのではないか。

オ 第13回大槌高校魅力化構想会議

日 時：令和4年12月23日（金）14時00分～16時00分

場 所：大槌町文化交流センターおしゃっち

内 容：全国留学事業について（アンケート結果、次年度の受け入れ体制等）
普通科改革支援事業について（ワーキンググループの進捗状況等）

発言要旨：

- ・ 生徒からの様々なニーズに対して、高校の先生だけで対応できるのか。先生方の負担が多くなってしまっているのではないか。
- ・ 内容としては良いが、財源が限られている中でどこまで実現できるのか心配な面もある。大人の都合で投げ出すことがないようにしなければならない。
- ・ 大槌高校に進学する生徒は学力の幅が広いので、探究的な学びを充実させることで子どもたちが学ぶことを楽しいと思えるのではないか。
- ・ 企業として、定期的にインターンシップを受け入れることは良いと思う。仕事で人と関わる経験を通して、コミュニケーションの大切さを知ってほしい。
- ・ コロナ禍の状況を考慮して、授業をオンラインで受けられる体制を整えるべきである。
- ・ 新しい科目では、地域での体験活動を行いながら基礎学力も併せて身につけられるように工夫してほしい。
- ・ 生徒のニーズに応えるためには、単位制にするという方向性もあるのではないか。
- ・ 地元の役に立てるような体験や取組を行い、地元に戻ってきたいと思えるようなキャリア学習を進めてほしい。
- ・ 新しい科目や学科が学校の特色となり、中学生が通いたいと思うことができれば、生徒数の確保にもつながるのではないか。
- ・ 義務教育段階の基礎的な学びを復習し、ある程度の学力を付けてから高校を卒業してほしい。
- ・ はま留学でアピールしている内容と実際のカリキュラムの整合性が取れるようにすべきである。
- ・ AI教材だけでは足りない部分もあるため、先生方が子どもたちにしっかりと向き合ってもらいたい。
- ・ 義務教育においても、高校で活かせる力をしっかりと付けてあげることが重要ではないか。

カ 第14回大槌高校魅力化構想会議兼普通科改革支援事業

令和4年度第2回コンソーシアム会議

日時：令和5年3月20日（月）13時00分～15時00分

場所：大槌町文化交流センターおしゃっち

内容：令和4年度事業報告（地域協働カリキュラム、放課後学習支援事業等）

全国留学事業について（令和5年度の受け入れ体制について）

普通科改革支援事業について（学科再編に向けた論点等）

(2) 運営指導委員会

大槌高校では事業の効果を高めるため運営指導委員会を設置し、研究開発の実施状況について有識者から評価助言を頂いている。

ア 運営指導委員会委員

| No | 所属 | 氏名 |
|----|-------------------------|--------|
| 1 | 東京大学教育学部教授 | 牧野 篤 |
| 2 | 富士大学経済学部 教授 | 佐々木 修一 |
| 3 | 東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 准教授 | 福田 秀樹 |
| 4 | 岩手大学教育学部 准教授 | 久坂 哲也 |

イ 出席者：

| No | 所属 | 氏名 |
|----|--------------------------|--------|
| 1 | 岩手県教育委員会事務局 学校教育室 高校教育課長 | 中村 智和 |
| 2 | 岩手県教育委員会事務局 学校教育室 指導主事 | 前川 啓太郎 |
| 3 | 大槌高校校長 | 継枝 斉 |
| 4 | 大槌高校副校長 | 竿代 愛也 |
| 5 | 大槌高校事務長 | 作山 雄一 |
| 6 | 大槌高校教務主任 | 鈴木 紗季 |
| 7 | 大槌高校進路指導主事 | 田中 貴広 |
| 8 | 大槌高校生徒指導主事 | 澤村 勇一 |
| 9 | 大槌高校1学年主任・カリキュラムWG長 | 畠山 豪 |
| 10 | 大槌高校2学年主任・DXWG長 | 近藤 健一 |
| 11 | 大槌高校3学年主任 | 野田 啓志 |
| 12 | 大槌高校 周知・広報WG長 | 菊池 直美 |
| 13 | 大槌町教育委員会学務課 班長 | 平野 正晃 |
| 14 | 大槌町教育委員会学務課 指導主事 | 小原 道宏 |
| 15 | 大槌高校カリキュラム開発等専門家 | 菅野 祐太 |
| 16 | 大槌高校地域協働学習実施支援員 | 小野寺 綾 |
| 17 | 大槌高校地域協働学習実施支援員 | 三浦 奈々美 |

ウ 令和4年度第1回運営指導委員会

日時：令和4年11月30日（水）10時00分～11時30分

場所：岩手県立大槌高等学校

内容：事業概要説明

令和4年度事業計画に関すること

ワーキンググループの推進状況に関すること

研究開発成果の分析・検証等に関すること

発言要旨：

[探究カリキュラム及び資質・能力に関すること]

- ・ 「なぜそれが課題だと思えるのか」ということを問うことで、課題を自分ごととして引きつけていくことができるのではないかと。
- ・ これからの時代に求められる「課題を発見する力」を、マイプロジェクトでの課題設定等を通して身につけてほしい。
- ・ 資質能力の育成において基盤となる自己肯定感を育むために、生徒の居場所づくりや受け入れてもらえる感覚についても検討してほしい。

[今後のカリキュラム検討に関すること]

- ・ より若いうちから学ぶ楽しさを伝えるためにも、小中高での連携した学びのあり方を検討してほしい。
- ・ 地域の課題解決のためには、地域外の課題に目を向ける必要がある。地域社会を学ぶ学科においても、地域のみならず広く社会に目を向け、他地域との比較をしながら学んでほしい。
- ・ 主体性とは、興味関心を持ってないものに対しても目標を持って計画立てて取り組める力である。生徒の主体性や自律的な学びに向かう姿勢を高校段階でどのように育ていくべきか検討してほしい。
- ・ 学んだから興味を持つ場合と興味を持つから学ぶという場合があるため、高校段階ではいろいろな学びに幅広く触れておく必要があるのではないか。
- ・ 高校のカリキュラムにおいては、生徒が自由に選べる部分だけでなく必履修科目もあることを生徒に認識させておく必要があるのではないか。

[評価・分析に関すること]

- ・ 学習の根底にある「学習動機」や「学習観」についても調査してほしい。

[その他]

- ・ 「何のために改革をしているのか」を念頭に置き、子どもたちが自分自身で人生を切り上げられるようになることを目指して取組を進めてほしい。
- ・ 協調型のリーダーシップを育成していくことで、地元企業でも長期的に活躍できる人材になるのではないかと。
- ・ 中学生が全県の高校を自由に選び、入学できるような工夫をしてほしい。

エ 令和4年度第2回運営指導委員会

日 時：令和5年2月27日（月）14時00分～16時00分

場 所：岩手県立大槌高等学校（委員はオンラインでの参加）

内 容：令和4年度事業報告に関すること
ワーキンググループの推進状況に関すること
研究開発成果の分析・検証等に関すること
令和5年度事業計画に関すること

発言要旨：

[探究カリキュラム及び探究的な学びの在り方に関すること]

- ・ マイプロジェクトでは、町に関連するテーマだけではなく、生徒自身が探究したいテーマを尊重することで多様性を持たせることを大切にしてほしい。
- ・ 基礎教科の中に探究的な要素やアプローチの仕方を入れていくことで、子どもたちが前向きに学習に取り組み、探究力と基礎学力を同時に伸ばす方法を模索できないか。
- ・ 個人探究だけに留まるのではなく、仲間で議論し合うなどのグループ活動も両立させることで、社会との調整を図りながらイノベティブな力を育むことができるのではないか。
- ・ 探究における問いを更新する過程で論理に飛躍が見られる生徒がいたため、節目でまとめの活動を取り入れ、考えを整理させる機会や関わりが必要ではないか。

[評価・分析に関すること]

- ・ 「One Team」の項目について、地域そのものの認識を広い視野で捉えつつ、社会全体における自らの役割を認識させることで、自己肯定感が高まり、数値の向上にもつながっていくのではないか。
- ・ 「課題設定」の項目では、生徒が地域課題の複雑さを感じて数値が下がっていることから、教員や地域から課題設定の在り方や課題の認識を問い直すための関わりをすることが必要ではないか。

[ワーキンググループの推進に関すること]

- ・ 学校側がICTで生徒の学びの状況を把握し、デジタルイゼーションで留まることなく、最適な指導のあり方を考えることや、単位取得等を踏まえた誰も取りこぼさない授業のあり方を模索することが、目指すべきDXの在り方ではないか。
 - ・ 想定より新学科の情報が地域に浸透しない可能性があるため、周知を徹底してほしい。
 - ・ これまでの普通科で学ぶことができていたことが新学科へ移行してもしっかりと学べるという部分を、地域の中学生、保護者やはま留学希望者に対して十分に説明してほしい。
 - ・ 地域での探究活動で身につけた力を活かせる大学や学部との連携を検討することで、高校卒業後の出口を魅力的にすると同時に、生徒たちの活躍の場所も広げていくことができるのではないか。
-

(3) 普通科改革研究協議会

日 時：令和5年2月23日（木・祝）15時00分～16時30分

場 所：大槌町文化交流センター おしゃっち

内 容：有識者、教員、生徒が登壇するパネルディスカッション及びワークショップ

[パネルディスカッションテーマ]

「大槌高校（小規模普通科高校）の未来を語る」

～地域全体で高校生の“大槌（ハンマー）”を育むために、私たちに何ができるか？～

[背景及び目的]

大槌高校と大槌町は、令和元年度から魅力ある学校づくりに向けて「大槌高校魅力化事業」を立ち上げ、様々な取り組みを進めてきた。高校と地域の連携が進んできた今、さらなる発展に向けて、生徒と地域双方にとって目指したい学校、通いたくなる学校に向けて、地域全体で構想していくことが求められる。

本会では、「大海を航る、大槌（ハンマー）を持とう」をコンセプトに掲げている大槌高校において、生徒・地域双方にとってより良い学校とは何か、今後私たちには何ができるかを考えていく機会としたい。

[登壇者]

- ・ 中川 覚敬氏（文部科学省初等中等教育局教科書課課長補佐
・ 前岩手県教育委員会事務局学校教育室学校教育企画監）
- ・ 酒井 淳平氏（立命館宇治中学校・高等学校キャリア教育部長）
- ・ 鈴木 紗季（大槌高校 教諭・教務主任）
- ・ 畠山 豪（大槌高校 教諭・教務副主任）
- ・ 遠藤 大地（大槌高校2年）
- ・ 菊池 康介（大槌高校1年）
- ・ 黒澤 直美（大槌町教育委員会事務局 学務課）※進行役

研究協議会 登壇者プロフィール

中川覚敬氏（文部科学省初等中等教育局教科書課課長補佐・前岩手県教育委員会事務局学校教育室学校教育企画監）

岡山市の中学校教員を経て、文部科学省に入省。初等中等教育局教科書課、生涯学習政策局男女共同参画学習課、復興庁への出向を経て、2015年に島根県海士町に地域教育魅力化コーディネーターとして派遣。前岩手県教育委員会事務局学校教育室学校教育企画監。

酒井淳平氏（立命館宇治中学校・高等学校キャリア教育部長）

文科省指定の研究開発学校・WWLの研究主任及びキャリア教育部長として、キャリア教育と探究を軸にしたカリキュラム開発を実践。文部科学省「ライフプランニング支援推進委員会」委員。国立教育政策研究所 高等学校特別活動『指導と評価の一体化』のための学習評価、評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究協力者。

パネルディスカッション内容：

ア パネラー自己紹介

イ 今回の趣旨説明

- ・ 魅力化を始める際に、大槌では「大海を航る“大槌(ハンマー)”を育成する」という教育ビジョンを地域と高校が共有している。(スクールポリシーにもなっている)
- ・ “大槌(ハンマー)”とは、自ら実感ができる強み=資質・能力を指す。
- ・ 大槌町では0～18歳の学びを掲げており、小中高の学びを繋げ、高校卒業段階で自分の“大槌(ハンマー)”を持ち、これからの予測不可能な社会を力強く歩んでほしいという願いがある。大槌で学ぶ高校生たちが“大槌(ハンマー)”を身につけるために、生徒・教員・地域の方それぞれに何ができるか、どのように在るべきかを考えていく機会としたい。

ウ 話題提供①「なぜ資質・能力の育成が求められるようになったのか」(中川氏)

- ・ 人口減少や情報化、グローバル化など、社会の変化は複雑で、予測困難な時代に生きている。これらは、地方における農業や漁業などにも大きな影響が出てくる。
- ・ このような「正解のない時代」においては、「答えのない課題に対して多様な他者と協働して、目的に応じながら納得解を導き出すような力」が必要である。
- ・ 変化の激しい社会に対応するため、今年度から高校でも新学習指導要領が実施されたが、大槌高校は新時代の学びを4年前から全国に先駆けて取り組んでいると思う。
- ・ これまで必要とされてきた「知識・技能」を身につけることはもちろん、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう人間性」などの資質・能力も重要になってくる。
- ・ それらは、学校だけでは身につけることはできず、地域社会の力が必要不可欠である。今後も、生徒たちが自ら関心あるテーマについて、地域の方々と関わり合いながら探究的に学んでいくことが求められる。

エ パネルディスカッション「大槌を身につけるために必要な機会とは？」

(2年生 遠藤さん)

- ・ 「帆を張る機会」：中学生の頃は、自分の好きなことややりたいことが分からなかった。しかし、高校に入って色々なチャレンジを重ね、自分について深く考える機会が多く持つことで、自分の将来の在りたい姿が見えてきた。

(1年生 菊池さん)

- ・ 「経験を食べる機会」：大槌が復興していく過程で、全国の様々な人と出会い、話す機会が役に立った。自分で様々な経験をしていくこと、多様な背景を持った人から様々な経験を聞くことを通して、成長ができると思う。

(講師 中川氏)

- ・ チャレンジをすることは、初めはハードルがあると思うが、どのようなきっかけでチャレンジをするようになったのか。

(遠藤)

- ・ 大槌高校では、先生が様々なきっかけをくれ、背中を押してくれる。

(講師 酒井氏)

- ・ 先生から与えられるチャンスを掴みたいと思うのはなぜか。一步を踏み出したいと思うのはなぜか。

(菊池)

- ・ 私自身も最初から生徒会など積極的な方ではなく、先生の後押しが大きかった。見た目は美味しくなさそうなものでも、食べてみたら美味しかったという感覚があるように、一回やってみると案外楽しいと思うことが多い。

(町教委 黒澤)

- ・ 学校や地域にはたくさんの機会がある中で、資質・能力を高めるためにどのように繋げて行けば良いのか、という現場の難しさもあるのではないかな。

(大槌教員 畠山)

- ・ 資質・能力は数字などで分かりやすく表現できるものではなく、育てていくことも難しいと感じる。探究活動の充実によって、少しずつ育っている実感もある。
- ・ 探究がきっかけで目標を持ち、学習に取り組むということができたら良いと思っているが、各教科へどのような視点で落とし込んでいけば良いのかを模索している。

(中川)

- ・ 探究的な学びが充実していると思うが、生徒の皆さんは5教科の学びについてはどれくらい必要性を感じているのかな。

(遠藤)

- ・ 教科の授業も大切だとは思いますが、やはり社会に出たときを考えると、行動力や考える力などの能力を育てていくことが大切だと思う。

(酒井)

- ・ 自分自身に力がついたと思う時は、どのような時かな。

(遠藤)

- ・ 自分で考え、行動し、何かを最後までやり遂げたときに、力がついたと思う。

(菊池)

- ・ 人から褒められたときに、自分の力を客観的に認識できると思う。

(中川)

- ・ 今のような力がついたと思う瞬間は、探究だけでなく教科の中でも作ることができると思うかな。現場の先生の意見を聞きたい。

(畠山)

- ・ 教科の中でも、「なぜこれが起きるのかな」という問いを持つ視点を取り入れることで、探究的に学ぶことができると思う。

(大槌教員 鈴木)

- ・ 教科だけでなく、総合探究でやっていることを各教科にも落とし込むという連動性を高めていくことができると思う。教科の学びと探究の学びを往還することで、生徒たちの

「できた」と感じる瞬間が増えると思う。

オ 話題提供②「生徒の資質・能力を高めることができる授業・特別活動・カリキュラムとは？」

- ・ 人からフィードバックをもらったり、自分のやったことを振り返ったりするときに、資質・能力の高まりを実感できるのではないか。
- ・ 振り返りは、「反省すること」ではなく、「経験から学び、未来につなげる活動」である。併せて、振り返るための「時間」や「場」の設定も重要である。
- ・ 振り返りの際は、「体験の質」に大きく左右される。質のある体験活動ができるよう、学校として環境を整えることが重要である。
- ・ そのために、地域の方との協働も必要不可欠である。学校側も活動のねらいをしっかりと地域に伝えていくことで、より良い協働関係が生まれる。

カ ワークショップ「高校生の“大槌(ハンマー)”を育成するために、自分の立場(生徒・教員・地域)で何ができるか？」

【参加者からの意見】

- ・ 自分の好きなものから学びにつなげる機会が増えると良い
- ・ 高校生が主体となって、周りの高校生や大人を動かすこと
- ・ 「高校生が求めている機会、成長できる機会とは何か？」を認識すること
- ・ 地域の立場から、高校生が大海を航することができるような「風」を作っていく



2 ワーキンググループにおける検討について

(1) カリキュラムWGにおける検討について

ア カリキュラムWGの設置目的

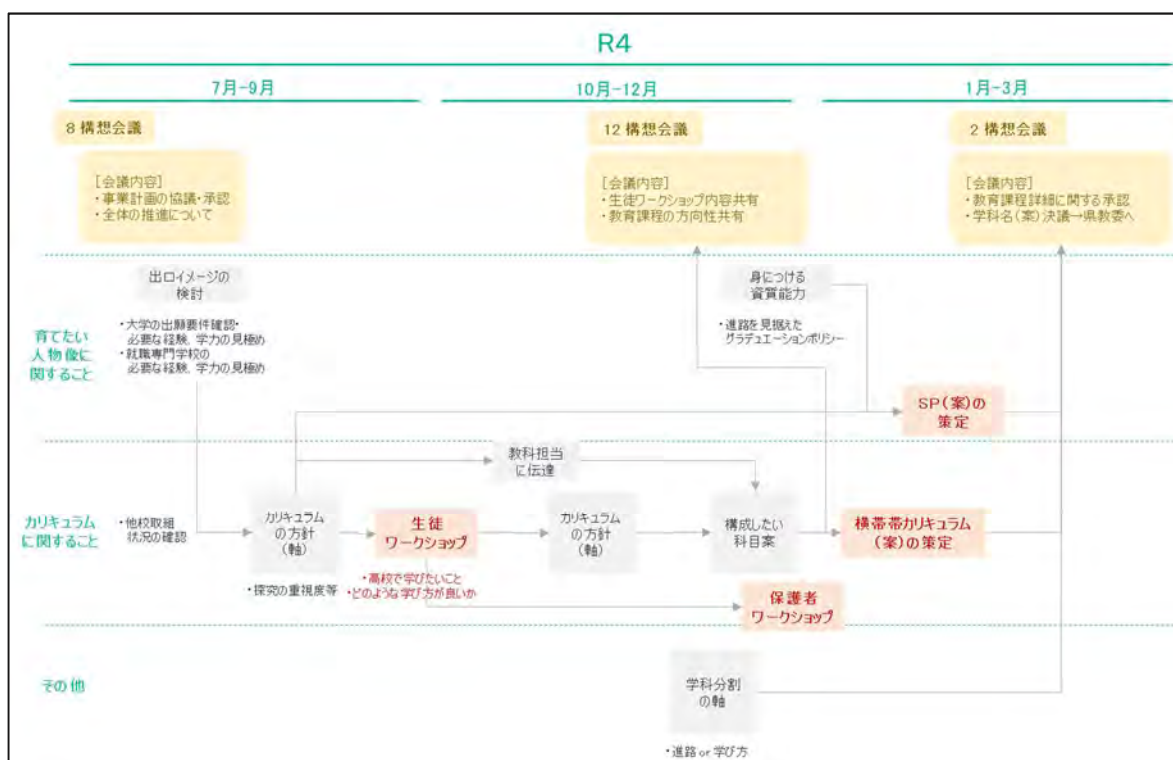
カリキュラムWGの設置目的は、新学科のカリキュラム策定を行うことであり、それに付随する①学科を設置した場合の学科スクールポリシー（案）の策定、②学科名の原案、③教科/探究学習のありかた、④科目選択の弾力性向上、⑤資質能力を基礎とした評価の在り方、⑥評価ルーブリックの見直しを図ることとなった。また具体的な検討事項としては当初、学科ごとの卒業時のありたい姿の設定、進路保証できるカリキュラムの在り方（入試形態に合わせたカリキュラム）、科目選択の拡充、単位認定方法などを具体的な検討事項としてとりあげていた。

イ 検討のスケジュール

今年度のカリキュラムWGの検討は大きく分けて3つの段階に分かれる。

- 【第1期】 検討テーマの設定、他校事例勉強会 (7月ー 9月)
- 【第2期】 生徒向けワークショップの検討・開催 (10月ー 12月)
- 【第3期】 カリキュラム策定方針や学科編成の検討 (12月ー 3月)

当初設定したスケジュール



ウ 第1期 検討テーマの設定、他校事例勉強会

| 会議名 | 日程 | 内容 |
|---------------------|-------------|---|
| 第1回 カリキュラム WG | 8/5 (金) | <ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの検討に関する放談 生徒の実態に関する共有 今後のスケジュール |
| 第2回 カリキュラム WG | 8/18 (木) | <ul style="list-style-type: none"> 今後の検討テーマ案の協議 先進事例校研究（事務局提示） <ul style="list-style-type: none"> －島根県立隠岐島前高等学校 －岡山県立和気閑谷高等学校 －長崎県立松浦高等学校 |
| 第3回 カリキュラム WG | 9/5 (月) | <ul style="list-style-type: none"> 先進事例校（事務局提示） <ul style="list-style-type: none"> －北海道伊達開来高等学校 －北海道登別明日中等教育学校 －愛媛県立三崎高等学校 －茨城県立茨木東高等学校 <p style="text-align: right;">等</p> |

まずは生徒の実態を共有することで、生徒にどのような機会を届けるべきか議論がなされ、その上で他校の事例研究を行い、カリキュラムに関する理解を深めた。ワーキングの委員からは、単位制を認めることで生徒の選択の幅を広げるべきではないかという意見やインターンシップ、英語以外の外国語の受講など生徒の意欲を高めるための様々なアイデアが出された。

共有された生徒イメージ

■ 大槌高校の生徒イメージ（地域普通科高校の抱える困難さ）

「多様な要望に応えられる学校」

＝様々な進路希望、学力、発達の特性、学び方への要望を持つ生徒への対応が必要



■ ケース① 探究等のグループ学習を苦手とする生徒への対応

探究的な学習の際にはグループでの活動を行うことが多いが、一部の生徒にとっては対人との関係づくりに苦手意識を持っている生徒もあり、学習効果が弱まっている。

■ ケース② 高度な学習を望む生徒への対応

国公立大学への進学を希望する生徒が増加している。他の生徒の進度に合わせるのではなく、進学の選択肢を広げる学力保障を行う必要性が出てきている

■ ケース③ 発達の特性を持つ生徒への対応

著しく学習への困難さを抱える生徒等様々な特性を持った生徒に対して、一斉の指導ではなく個別の支援の必要性が高まっている。

■ ケース④ 学習の定着が不十分な生徒への対応

系統立てて行う教科学習の中で学習の定着が不十分な生徒にとっては、授業の進度についてこられず、学習への意欲が高まらない。

エ 第2期 生徒向けワークショップの検討・開催

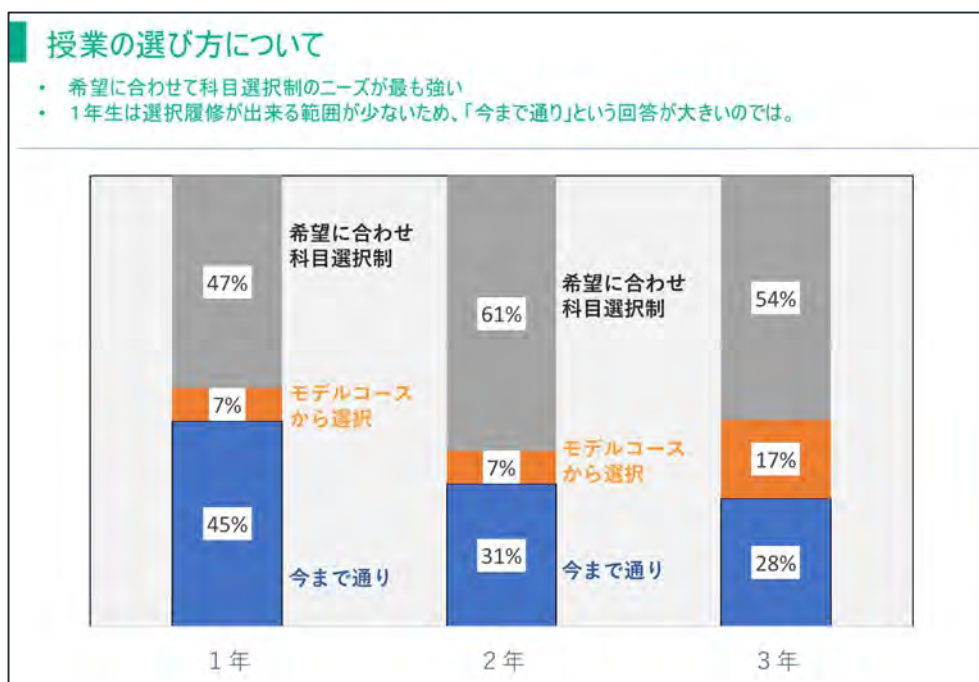
| 会議名 | 日程 | 内容 |
|----------------------|--------------|---|
| 第4回 カリキュラム WG | 9/20 (火) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒ワークショップの進め方 ・ 今後の検討の軸について |
| 第1回 生徒ワークシ ョップ | 10/6 (木) | <p>【第1回生徒ワークショップ 場所：体育館】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副校長あいさつ ・ 生徒会長あいさつ ・ 魅力化に関する趣旨説明(魅力化のこれまでと実際に魅力化されたことに関する共有) ・ 生徒ワークショップ [テーマ]大槌高校をさらに魅力的な学校とするために取り組むべきこと ・ 校長まとめ |
| 生徒向けアン ケートの実施 | 10/13 (木) | <p>以下の項目についてアンケートを実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科目選択について ・ 学校独自の学びについて ・ 必要だと思ふ学校設定科目について 等 |
| 第2回 生徒ワークシ ョップ | 10/20 (木) | <p>【第2回生徒ワークショップ 場所：体育館】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副校長あいさつ ・ 生徒会長あいさつ ・ アンケートの結果共有 ・ 生徒ワークショップ [テーマ]大槌高校のカリキュラムをさらに魅力的な学校とするために取り組むべきこと ・ 副校長まとめ |
| 第5回 カリキュラム WG | 11/17 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒ワークショップの共有 ・ 普通科改革の基本的な方向について |

第2期ではカリキュラムを受ける当事者となる生徒の意見を聞くためのワークショップを開催した。全校生徒が体育館に集まり、魅力化に関する検討を行った。

生徒ワークショップの様子



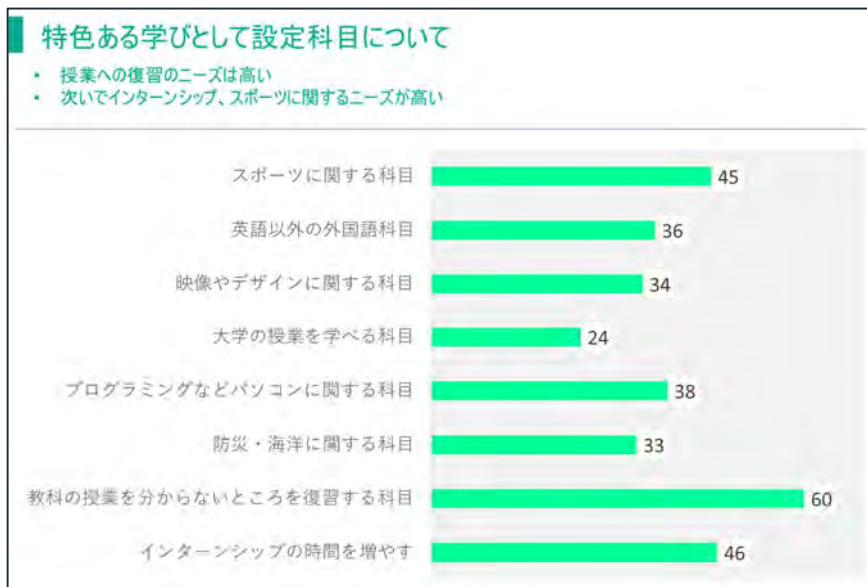
次に生徒アンケートについてである。まずは授業の選び方については以下のような回答となり、生徒にとっては希望に合わせて科目選択制としてほしいという要望を持っている生徒が多いことがわかる結果となった。



また、学校独自の科目については、基礎学力の定着に関する要望が最も多く、次いで学校独自の特徴的な学びや言語能力や学びに関する要望が多かった。基礎学力定着のニーズが非常に高かったのは、普段の授業やこれまでの学習により、基礎的な学力の修得実感が得られていないのではないかということも推測される。



また、特色ある学びとして設定してほしい科目については、教科の授業の分からないところを復習する科目やインターンシップの拡充をしてほしいという要望があり、先述した復習に関する科目や社会に出た際に役立つ実用的な科目を求めていることがわかった。そうしたアンケートを踏まえてカリキュラムの方向性を打ち出した。

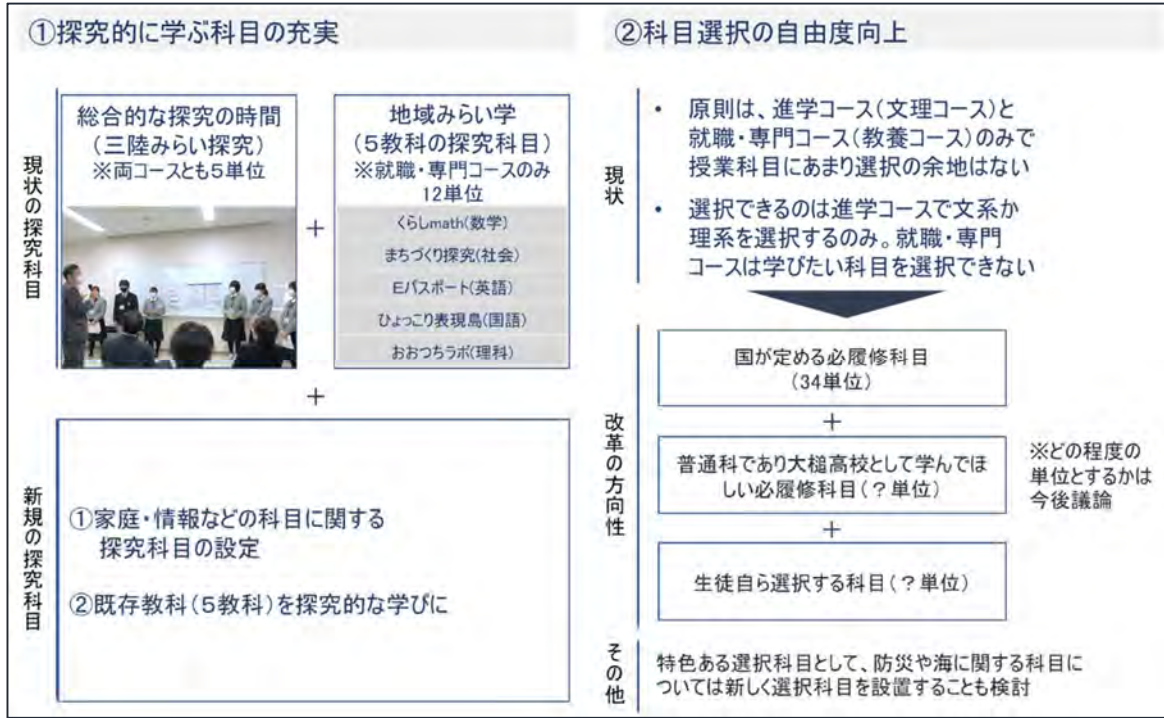


オ 第3期 カリキュラム策定方針や学科編成の検討

| 会議名 | 日程 | 内容 |
|---------------------|--------------|---|
| 第6回 カリキュラム WG | 12/27 (火) | <ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの策定方針について 単位制普通科等の制度の在り方 |
| 第7回 カリキュラム WG | 1/24 (火) | <ul style="list-style-type: none"> 新学科の編成について |

| | | |
|---------------------|-------------|-----------------|
| 第8回 カリキュラム WG | 3/15 (水) | ・ 教育課程表（試案）について |
|---------------------|-------------|-----------------|

生徒へのワークショップ等からカリキュラムの策定方針を以下の6つとした。



⑤リメディアル(復習科目の充実)

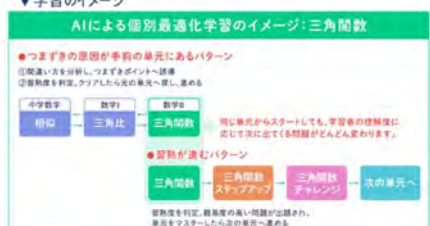
現状の課題

- 中学校までの既習範囲の理解がバラバラで、同じ授業を全ての生徒に行うことが難しい
- 今後学び続けていくためにも主要科目の基礎的な理解が必要となる
- 生徒からも授業の復習への強いニーズがある

改革の方向性

- それぞれの理解に応じて個別最適化された学習を実現する
- 生徒がわからないところに立ち戻り、学び続けることのできる力を養う(学び続ける学習観との接続)

▼学習のイメージ




⑥授業のオンライン履修の一部認可

現状の課題

- コロナ禍等により、学校で授業を受けることが叶わない生徒が一部いた
- また教室に入ることが難しい生徒もあり、オンライン等を活用して学びの機会保障を行う必要がある

改革の方向性

- 一部限定的にオンラインでの履修等を認めることで、生徒の学び方に合うような履修方法を検討する(オンラインのみでの履修を認めてしまうことで、授業に参加しない生徒が増えることも考えられるため、慎重に検討したい)



そうした方針の下で、実際の教育課程に反映することができるようカリキュラム構成の案を練っているところである。また、もともとワーキンググループ委員からあがっていた単位制普通科高校に移行する検討については、単位制に移行したとしても標準法に定められている算定基準では教職員数の増加は見込めないことから、単位制への移行は検討しないこととした。

さらに学科の持ち方に関しては、当初本校にある1学級を普通科として残し、もう1学級を新しい学科にする案なども検討されたが、生徒の科目選択への自由度を減らすこととなり生徒の要望に合わないことから1学科とし、科目選択の自由度を向上させることを図る。また、それに伴い普通科普通科への進学希望も地域にはあることで、生徒数が減少する見込みがあることから、積極的に地域や中学校への広報活動を行い、取り組もうとする普通科改革への理解を促すことが重要であることが確認された。

| | 現行 | 案① | 案② |
|--------|---|--|--|
| 大分類 | 普通科 | 普通科 | 普通科 |
| 小分類 | — | 普通科 地域社会学科(仮) | 地域社会学科(仮) |
| コース | 文理コース 教養コース | なし | なし |
| 検討ポイント | <ul style="list-style-type: none"> 現行ではコースを越える科目選択を行うことはできない 普通科改革の中で特色ある学科を作る必要がある | <ul style="list-style-type: none"> 科目選択には学科を越えることとなり難易度が上がる 普通科普通科が残ることとなり、生徒数減少は考えにくい | <ul style="list-style-type: none"> 科目選択の柔軟性が高くなる 普通科普通科が設置されないため、生徒数減少が起こる可能性がある(学科改編のメリットを伝え、理解を求める。また普通科の枠は変わらないことを強調) |

上記の結果を受け、新学科名や具体的なカリキュラムについて次年度以降検討を進めていく。

(2) DX等教育方法検討WGにおける検討について

DX等教育方法検討WGでは、「新時代に対応した”生徒の学び方”と”教員の働き方”を
実現するための効果的なICT活用方法とは？」というテーマを掲げ、①授業領域における
実証実験と、②校務領域における実証実験に取り組んだ。授業領域における実証実験では、
個別最適な学びや協働的な学びを実現するための授業実現を目指し、国語・数学・英語・理
科・社会の主要5教科において、本WGに所属する各担当教員がそれぞれ研究授業と研究協
議を実施した。校務領域における実証実験では、岩手県立高校で導入している Microsoft
Teams の機能等を最大限活用して校務の効率化を目指した取り組みを行ってきた。組み
のスケジュールは下記の通りである。

| | R4年10月 | R4年11月 | R4年12月～R5年1月 | R5年2月～3月 |
|------|----------------------------|------------|--------------|----------|
| 授業領域 | ICT等の活用案検討 | 各教科ごとに実証実験 | | 実証振り返り |
| 校務領域 | Microsoft Teamsの機能分析・活用案検討 | | 各業務ごとに実証実験 | |

ア 授業領域における実証実験

(ア) 「個別最適な学びの実現」をテーマとした授業（11月～12月）

11月～12月の期間は、「個別最適な学び」を実験のテーマとして掲げ、理科と数学におい
てそれぞれ研究授業を行った。授業の内容と結果は下記の通りである。

| テーマ:補助教材サイト“Java実験室”を活用した個別最適な授業の実現 | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|
| | 基本情報 | 授業の内容 | 現状の成果と課題 |
| 理科における実証実験 | ■対象 2年生教養コース37名 ■単元名 化学基礎 「化学結合～組成式～」 ■使用教材 補助教材サイト 「Java実験室」 | 授業冒頭でサイトの使い方を説明した後に、学び方を自ら選択して問題演習に取り組む。 ①サイトを使用しながら、組成式のイメージを持つ。 ②サイトを使用しながら、教員が自作したプリントの問題演習に取り組む。 ③サイトを使用せずに、ワークブックの問題演習に取り組む。  | 【成果】 ・教材が、教員の頭の中にあるイメージ図の生徒転用をサポートしてくれた。 ・生徒同士での教え合いが活発に行われるようになった。 ・内容理解に時間がかかる生徒に対してじっくりとサポートできるようになった。 【課題】 ・どの単元にも対応できる教材探し。 |
| | 数学における実証実験 | ■対象 2年生生理コース21名 ■単元名 数学B「数列」 ■使用教材 AI教材「Qreous」 | 授業冒頭に、全体で例題の演習を行った後に、習熟度別に問題演習に取り組む。 ①例題が解けなかった生徒 →教員による個別サポートor生徒同士での教え合いにより、例題を解けるようにする。 ②例題が解けた生徒 →Qreousを活用して問題演習を行う。 ③Qreousでの演習をクリアした生徒 →模試対策の問題に取り組む。  |

(イ) 「協働的な学びの実現」をテーマとした授業（1月～2月）

1月～2月の期間は、「協働的な学び」を実験のテーマとして掲げ、英語と社会においてそれぞれ研究授業を行った。授業の内容と結果は下記の通りである。

| テーマ: Microsoftのツールを活用した協働的な学びの実現 | | |
|---|--|---|
| 基本情報 | 授業の内容 | 成果と今後の課題 |
| <p>英語における実証実験</p> <p>■対象 1年B組30名</p> <p>■単元名 論理・表現 I「関係代名詞」</p> <p>■使用教材・ツール等 Microsoft Teams Microsoft Forms</p> | <p>① Microsoft Formsを活用した英単語テストの実施。 ペアワークによる暗記→テスト実施</p> <p>② 関係代名詞 who を活用した英文を1つ作成しMicrosoft Teams上に投稿。</p> <p>③ 他の生徒が投稿した英文を見ながら気に入った英文を5つ書き出す。</p> | <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全体を通して思考、表現が活発に行われ、全生徒が能動的に参画していた。 スマートフォンの利用とプリントへの記入の往還が活発に行われ、メリハリのある授業になった。 単語テストの採点業務が減った。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 表現活動のハードルを下げることで、知識・技能の定着をどのように両立させるのか。 |

| テーマ: 学習用動画サイト“NHK for School”を活用した協働的な学びの実現 | | |
|---|---|--|
| 基本情報 | 授業の内容 | 成果と今後の課題 |
| <p>社会における実証実験</p> <p>■対象 2年生58名</p> <p>■単元名 現代社会「裁判員制度」</p> <p>■使用教材 NHK for School「普通法廷」 Microsoft Forms</p> | <p>① NHK for School「普通法廷」の動画視聴</p> <p>② 裁判の論点を整理し、個人の判決とその理由をMicrosoft Formsに投稿。</p> <p>③ 少人数グループで判決とその理由をまとめ、発表する。</p> | <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動画教材によって、裁判の具体的なイメージを持つことができた。 Formsへの投稿とグループワークを混ぜることを通して、すべての生徒が活動に参加していた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動画の時間がやや長く、議論に十分な時間を割けなかった。 少人数グループ内での議論の内容をどう見える化し、質を高める助言ができるか。 |

(ウ) 「学び直し（リメディアル）」をテーマとした授業（2月）

最後に、「学び直し（リメディアル）」を実験のテーマとして掲げ、国語において研究授業を行った。授業の内容と結果は下記の通りである。

| テーマ: Microsoftのツールを活用した、学び直しに取り組める授業の実現 | | |
|--|---|--|
| 基本情報 | 授業の内容 | 成果と今後の課題 |
| <p>国語における実証実験</p> <p>■対象 1年B組30名</p> <p>■単元名 現代の国語「漢字」</p> <p>■使用教材・ツール等 Microsoft Teams Microsoft Forms</p> | <p>① 各級（5級・4級・3級・準2級・2級）から読み・書きそれぞれ5題ずつ抽出した小テストの実施。</p> <p>② 小テストの結果をMicrosoft Formsに入力し、最も得点率が低かった級の問題演習に取り組む。</p> <p>③ 各級の確認テストをMicrosoft Teamsで配信し、生徒は自分が取り組む級を選択し、テストを受ける。</p> <p>④ 確認テストの結果とその振り返りをMicrosoft Formsに入力する。</p> | <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで、全員が同じ進度で一律に行っていた漢字練習だったが、小学校で習う範囲の漢字を覚えられていない生徒でも、自分のレベルに合った問題に取り組むことが可能になった。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学び直しに取り組んでほしかった生徒が、小テストでたまたまいい点数を取ってしまったために、自分のレベルに合った問題演習に取り組むことができなかった。 |

イ 校務領域における実証実験

校務領域においては、はじめに本WGに所属する教員がそれぞれ感じている課題意識を洗い出し、Microsoft Teams等の機能を活用することで効率化できる可能性のある項目を抽出した上で実践を進めた。これまでに行った主な実践の項目と結果は下記の通りである。

| No | 項目 | 実践前の状況 | 実践後の状況 |
|----|----------------|--|---|
| 1 | 生徒への連絡・伝達方法の改善 | 朝の職員朝会、生徒 HR における連絡を口頭もしくは紙で行い、欠席者への連絡や紙の印刷に手間がかかっていた。 | 連絡事項をクラウド上に集約することにより教員の準備にかかる手間が省けた。また、欠席者も学校外から連絡を確認できるようになった。更に、教室掲示物等の資料もクラウド上で共有するようになった。 |
| 2 | 各種アンケートのForm化 | アンケートを紙で実施し、集計作業もすべて手動で行っていた。 | アンケートをFormsで作成することにより、配布・回収・集計作業の手間が減った。 |
| 3 | 各種資料の電子化 | 毎月行われる職員会議等の資料を、毎回紙で印刷、製本、配布を行っていた。 | PDF化した資料をクラウド上で共有し、各自が自身の端末で見られるようにした。 修学旅行のしおりも電子化し、情報漏洩のリスク回避や、旅行中の加筆・修正が容易になった。 |
| 4 | 資料の共同編集 | 生徒や保護者からの集約が必要な案内を紙で配布し、回収、集計等に手間がかかっていた。 | 三者面談の日程調整や生徒への課題等を、クラウド上で共同編集できる状態で共有し各自の端末で直接入力できるようにした結果、回収や集計の手間が減った。 |

ウ 今後に向けて

今年度は、ICTの活用が得意ではない教員も多くいる中で、この分野に明るい教員を中心に活用方法等の教え合い・学び合いを行いながら実践を進めてきた。そうした実践の成果として、各教員が持つICT活用に対する苦手意識や抵抗感等が薄れてきており、より効果的な活用方法について議論する風土が少しずつ醸成されてきた。今後は、実践を本WG内での取り組みに留めずに、学校全体を巻き込んだものに拡大させていく必要がある。特に、授業に領域における実践においては、カリキュラムWGで議論されている内容と連動しよりテーマを明確にした具体的な改革に取り組んでいく。

(3) 周知・広報WGにおける検討について

ア 検討テーマと目的

本WGでは、「新時代に必要な学びを、どのように中学生や保護者に理解・浸透させていくか？」を検討テーマに置き、以下3つの観点で取組を実施した。

- ①周知する「対象」の検討（特徴的な学びに興味を持つ層をイメージする）
- ②周知する「機会」の検討（全生徒・教職員で広報・周知を行う体制づくり）
- ③周知する「手法」の検討（中学生・保護者に効果的に伝わる方法を模索）

新学科の具体的な周知は令和5年度からとなるため、令和4年度は現在の取組を地域住民に広く周知する機会や手法を検討した。特に近年はコロナ禍の影響で、生徒の成長を保護者や地域住民に直接見てもらう場を設けることができなかつたことから、地域に向けた情報発信に積極的に取り組むこととした。

| | R4 9月～10月 | R4 11月～12月 | R5 1月～3月 | R5 4月～6月 | R5 7月～9月 | R5 10月～12月 | R6 1月～3月 |
|-------|--------------|------------|----------|-----------------|-----------|--------------------------------|----------|
| 校内行事 | 文化祭での取組展示 | | 探究発表会の開催 | 「地域みらい学」公開授業 | 文化祭での取組展示 | | 探究発表会の開催 |
| 中学生向け | 中学生の進学状況分析 | | | 高校説明会 一日体験入学 | | 中学生・保護者・地域住民向け 新学科説明会の開催(仮) | |
| 検討事項 | 町内への取組周知方法検討 | | | 新学科の周知方法検討 | | | |

イ 大槌高校の入学者に関する分析

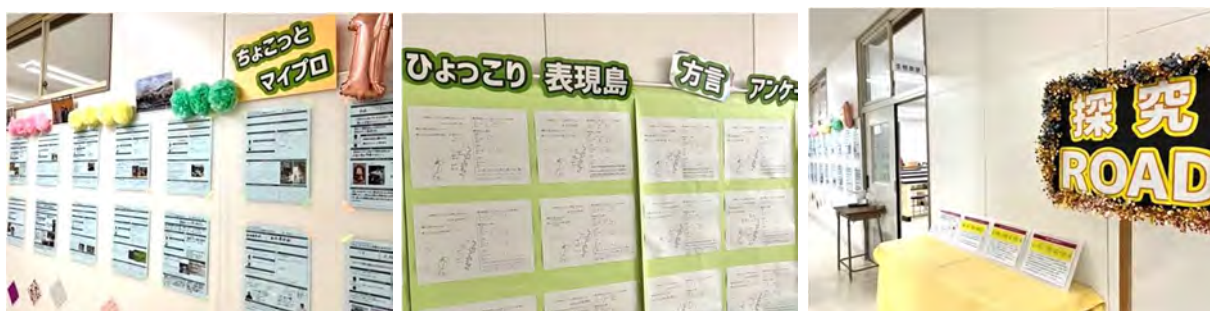
町内及び近隣自治体の中学生がどのような目的で高校を選択しているのかを分析した。過去5年間の大槌高校入学者層の推移を見ると、令和元年度の魅力化事業開始以降、近隣自治体からの生徒が増加し、出身中学校の構成も多様化していることが分かった。また、町内中学生の分析から、釜石市内へ進学している生徒は、大学進学または商業資格取得を目的とし、管外進学生徒はスポーツを目的としていることが見えてきた。さらに、大槌・釜石地区の7中学校の高校進学先の分析等も実施した。以上の分析から、本校でどのようなカリキュラムを充実させていけば生徒数の確保が見込めるのかを予測・提案した。

ウ 文化祭及び地域での探究活動展示

以下の日程で、探究活動の成果を町内の施設等に展示し、地域住民に本校の特徴ある取組を周知した。生徒一人ひとりの顔が見える展示を行ったことで保護者からの注目も高く、生徒の取組状況を見てもらうことができた。

[校内展示企画]

- ・ 10月14日(金)～10月15日(土)：文化祭期間に実施



[第1回展示企画]

- ・ 12月12日(月)～12月19日(月)：シーサイドタウンマスト 1階センターコート
- ・ 12月19日(月)～12月26日(月)：大槌町文化交流センターおしゃっちエントランス

※1年生「ちょこっとマイプロ」の活動まとめポスターを展示



[第2回展示企画]

- ・ 2月14日(火)～2月20日(月)：シーサイドタウンマスト 1階センターコート
- ・ 2月20日(月)～2月27日(月)：大槌町文化交流センターおしゃっち エントランス



※3年生「18年間で身につけた“大槌(ハンマー)”」の活動まとめポスターを展示

エ note 等を活用した情報発信

県内の全県立高校にnote pro アカウントが配布され、本校でもnoteを活用しながら探究の取組や学校行事、メディア掲載のお知らせ等を掲載している。10月以降は、周知広報WGの各教員が持ち回りで、授業や研究会等に関連する記事を作成した。



オ 地域に開かれた「探究発表会」の実施

2月23日(木・祝)に、大槌町文化交流センターおしゃっちにて、1・2年生の探究学習の成果発表会を実施した。昨年度は、新型コロナウイルスの拡大により中止となったため、

地域での探究発表会は初めての開催となった。町内から約 160 名、県内・県外から約 70 名の来場があり、多くの方に生徒の成長を直接感じてもらう機会となった。

【第 1 部】 1 年生「大槌町の課題解決アイデア発表会」

【第 2 部】 2 年生「マイプロジェクト活動成果発表会」

【第 3 部】 研究協議会 パネルディスカッション

テーマ：「小規模普通科高校の未来を語る」

登壇者：中川覚敬氏（文部科学省初等中等教育局教科書課課長補佐・

前岩手県教育委員会事務局学校教育室学校教育企画監）

酒井淳平氏（立命館宇治中学校・高等学校 キャリア教育部長）

教員 2 名・生徒 2 名



カ 今年度の成果・課題と次年度以降の方向性

- ・ 地域での展示企画は、普段から高校生と接する機会のない住民にも本校の取組を周知することができ、新たな対象への周知方法を見出すことができた。新学科に関する情報や特徴についても、地域住民の生活に身近な場所を選んで伝えていくことで、より効果的な周知につながると考える。
- ・ 探究発表会では、授業や地域活動等に関わった方々に多く来場いただけた。生徒たちが自分の意見を堂々と述べる姿が、取組への成長を実感するといった声があった。
- ・ 地域への周知が広がる一方で、入学者数に直結する近隣中学生や保護者への効果的な周知方法については、今後検討を重ねていきたい。次年度は、中学校への学校説明会を、管内だけでなく広域で実施できるよう検討したい。